

私学の魂

文化学園大学杉並中学・高等学校



CHANGE and GROW! 来春2018年から中高ともに共学校化! “ダブルディプロマ”の手ごたえと成果をバネに 世界標準の学びを進化させる「21世紀型教育」校!

2015年度から高校に、カナダと日本の高校卒業資格の両方取得できる「ダブルディプロマ」プログラムを日本で初めて導入し、注目を集めてきた文化学園大学杉並中学・高等学校。その手ごたえをバネに、男子受験生からの期待にも応えて、来春2018年から中高とも共学校化に踏み切る同校は、首都圏中学入試における注目校のひとつになっています。

その文化学園大学杉並中高の歴史と進化を40年以上見守り続け、この数年の改革をリードしてきた校長の松谷茂先生と、来春からの共学校化にあたっての準備を中心になって進める教頭の青井静男先生、教務部長（兼入試広報副部長）の小島浩司先生に、今回はお話を伺いました。



校長 松谷 茂先生

DATA

1

文化学園大学杉並中学・高等学校

- 沿革 1926（大正15）年 城右高等女学校を現校地に設立。
1974（昭和49）年 文化女子大学（現・文化学園大学）の附属となり校名を文化女子大学附属杉並中学・高等学校と変更。
1999（平成11）年 新館（地上6階・地下1階、建延9,772㎡）落成。
2011（平成23）年 文化学園大学杉並中学・高等学校に校名変更。
2014（平成26）年 9月、カナダ・ブリティッシュコロンビア州が海外校（オフショアスクール）に認定。
2016（平成28）年 創立80周年を迎える。
2018（平成30）年 中学・高校ともに共学校化。中学校に「ダブルディプロマ準備コース」新設。

校長 松谷 茂

所在地 〒166-0004 杉並区阿佐谷南3-48-16
TEL：03-3392-6636（代表）
<https://bunsugi.jp/>

交通 JR「阿佐ヶ谷駅」「荻窪駅」から徒歩約10分。

世界でも評価の高いカナダの教育。 その「ダブルディプロマ」プログラムを 男子受験生からも望む声が！

来春 2018 年からの共学化に踏み切った経緯を、まず校長の松谷茂先生に伺いました。

「来春 2018 年からの共学化に踏み切った理由としては、5 年前の 2012 年から大学が共学化し、文化女子大学から文化学園大学になったことが背景にあり、さらに 2 年前の 2015 年から高校に『ダブルディプロマ』プログラムを導入したことが、中高の共学化を本格的に検討するきっかけになりました」と松谷茂先生。

教育界では大きな注目を集めている同校の『ダブルディプロマ』コースの第 1 期生は今年高校 3 年になり、その手ごたえや成果、周囲からの期待も非常に高まっているといいます。

「もともとカナダの教育は、たとえば『PISA (OECD 学力調査テスト)』でも第 3 位であるように、世界でも高く評価されています。そのカナダ BC(ブリティッシュコロンビア) 州のプログラムのもとで、カナダと日本の両方の高校卒業資格を取得できる学びに取り組んできた生徒が、思っていた以上に高い成果をあげていることが、私たち教員にとっての自信になりました。

それは想像していた以上に良い教育内容でした。アクティブラーニングの展開は、まさにこれまでの日本の講義型の授業ではなく、生徒が主体的に調べ、まとめて、友達と話し合ったり、先生と相談して、自分の考えをまとめて発表するという学び方を目の当たりにして、そういう教育プログラムの良さと生徒の伸びを実感することができました。

例えば英語の学力はたった 1 年間で圧倒的に伸びて、平均でも偏差値 70 以上という目覚ましい成長を見せてくれました。日本の英語の学力テストの準備はとくにしていなのに、それでも十分な成果を出せたのですね。

それ以外の教科でも様々な取り組みがあり、数学や理科では、生活環境のなかで必要な数学、必要な物理

・化学・生物などを身の回りの物事から考えさせ、まず議論したり話し合ったりして学ぶことのできるプログラムがとても良いと感じました。

こういう『ダブルディプロマ』プログラムで学べる教育環境を、男子にも提供したいと考えたことと、将来の男女共同参画時代の社会を見据えて、意見交換などのときにも男子と一緒にのほうが、違った考え方を受け入れ、多様な考えを共有できると考えたことが、共学化に踏み切る大きな理由になりました。

また、そういう“世界標準の”教育プログラムのもとで、高い英語力を維持したいと考える帰国生や、男子の受験生と保護者からの問い合わせや受け入れの要望が増えてきたことも、共学化への機運の後押しをしてくれました」と松谷先生。

CHANGE and GROW ! 来春 2018 年から中高ともに共学校化！

——共学化を考えたことで、中学校の新たなカリキュラム導入や「i - プロジェクト」の始動につながったわけですね。

「高校に『ダブルディプロマ』コースを設けたことで、英語力が確実に伸びるノウハウがわかってきたことが強みになりました。たとえばダブルディプロマ第 1 期生 (現高 3) の生徒は、13 名中、英検 1 級を 2 名、準 1 級を 9 名、残り 2 名が 2 級を取得していて、卒業までにさらに級を上げることができ、成果は明らかです。そして非常に高い英文の読解力とエッセイ (ライティング) の力を身につけています」と松谷先生は、その確かな成果を実感しています。

昨年から実施してきた中学校の新たなカリキュラムの、英語の週 9 時間のうち 7 時間がネイティブ (1 コマにネイティブ 3 名を配置) 主導型の授業という形も、ダブルディプロマのノウハウから生まれたものです。

「その結果、現在の中学 2 年生の入学から 1 年間の英語読解力の伸びが著しく、ある模試での英語の学力テストの偏差値が平均で 5 ポイントも上昇しました」と松谷先生。

——それはすごいですね！

「すでに中 3 の生徒には英検準 1 級や 2 級の帰国生もいますが、今後は学年の生徒全員が中学生のうちに英検準 2 級くらいまでは取得できると思っています」と松谷先生。

——それ以前は中学の英語の授業は違った形だったのですか？

「それまでは週 7 時間の英語授業のうちネイティブの授業は 2 ~ 3 時間だったのを逆転して、ネイティブ





高校の「ダブルディプロマ」コースではICT活用も「生徒が自主的に学べる」ポイントになっている。

による授業を増やしたのです。中学3年までは英語の偏差値が50前後だった生徒が、高校1年のときには65くらいまで伸びたケースもありました」

——「英語の4技能」でいうと、どの力が伸びているのですか？

「とくに読解力が著しく伸びています。自分で考えたことを話し、文章、エッセイも書かせるという授業がプラスになっていると思います。初期の頃、カナダから来てくれたダン校長から『生徒のエッセイがすごく良いので見てごらん』といわれたときに、たまたま私が文中のスペルが違う箇所を指摘したら、逆にダン校長に叱られました(笑)。BCの英語教育が重視するのは、そういうことではないのだそうです。

英検でも準1級や1級レベルになると社会的なことも問われるので、そういう知識や思考力もないといけませんが、それをクリアできる力も身に着いたようです。

中学校に新しく導入する『ダブルディプロマ準備コース』では、数学と理科で「英語イメージ」の授業も行います。高校の『ダブルディプロマ』の授業は通常よりも多少費用が多くかかるのですが、この中学校の『ダブルディプロマ準備コース』の授業は無償ということになっています。本校にはネイティブの教員がいま13名いるのですが、そうしたネイティブ教員が、生徒の習熟度別に3段階に分けて英語の授業をしています」と松谷先生は説明してくれました。

「もうひとつは、今年度から、これまでの授業時間より5分短い45分授業に変更しました。火曜・木曜はこれまで7時間目まで授業がありましたので、その形で変わりませんが、それ以外の日には14時40分に6時限が終了します。その分、生徒は部活動や習い事も余裕をもってできますし、教員はその後に生徒の学習サポートや面接をする時間が取れるようになりました。心配事や生徒のやりたいことも含めて、じっく

りと生徒の話を聞いてあげられる時間が作れたことは、とてもプラスになったと思います。ネイティブの先生による英会話の部屋もつくりました」と松谷先生。

失敗を恐れずに自ら発信する 『いつかできるから!』、 『I can do it』の教育姿勢

——生徒が落ち着いて学習できるようにするためには、心のケアも必要ですね。

「そう思います。そして、いま時代の流れが変わり、今後の『答えのない時代』に生きる生徒たちには、英語力はアイテムとして必要ですが、何より『自分で考えて行動できる力』、『自分で発信する力』を持った生徒を育てたいと考えています。これも『ダブルディプロマ』の考え方から学んだことです。

たとえば生徒は、カナダから来たダン校長とよく話をするのですが、ダン先生は、生徒がそれまでは『よく考えて、ミスをしてはいけない』と思って英語を使っていたのが、『そうではない』ということに気づかせてくれました。失敗とか間違いも子どもたちにとっては、常に『OK!』という考え方です。誰もが最初はミスから始まる。『わからなければ助けてもらいなさい』というような感覚です。それで『いつかできるから!』、『I can do it』という言葉をかける、その大切さを学んだ気がします」と松谷先生は強調します。

問題発見→協働→発信の学びで 『思考力・判断力・表現力』を 育てる「i-プロジェクト」!

——続いて教務部長の小島浩司先生に、新たな「i-プロジェクト」のお話を中心にお聞きします。

「新たに導入する『i-プロジェクト』は、『intelligent (知識・技能)』、『impressive (発信力・創造)』、『international (インターナショナル)』の3つの『i』をキーワードにして、『問題発見』→『協働』→『発信』の一連の流れを学びの随所に取り入れ、大学入試の新テストで試される『思考力・判断力・表現力』を徹底的に鍛えるものです」と小島先生。

共学化での新たな学びの柱となる、この『i-プロジェクト』では、入学の当初は「家庭学習『ゼロ』から始める環境作り」というユニークな方針も謳われています。

「地上5階建ての別棟『MIRAI館』に、新しく2つの自習ルームを現在工事中です。カフェ仕様の『i-ス

タディ・ルーム（アイスタ）、きめ細やかな講習や進路面談が可能な『B-スタジオ（ピースタ）』では、午後7時までの集中学習ができるようにします。いまの生徒には、スタバみたいところで学習できる場が好まれますよね。家でたくさん勉強するように仕向けても、なかなか手の届かないところがありますので、それならば最初は『家庭学習ゼロ』でも、学校で十分に学習できる環境を作りたいと考えました」と小島先生。



教務部長の小島浩司先生

—それはいいですね。ただ、すでに『ダブルディプロマ』の生徒は、自分から勉強するようになっているように、最終的には自分である程度勉強してこないといけない、その形をめざすための教育環境作りということですね。

「その部分が今後の肝ですね。ですので、現在は自習室も個別でのスペースになっていますが、今後はやはり大きなテーブルで協働できる自習室とか、生徒どうして議論しながら放課後の課題学習の時間が設けられるようなスペースもないといけないと考えています」

—『i-プロジェクト』では、学習の『PDCA』サイクルや『ループリック評価』が謳われていますが、これは全教科にまたがるものですか？

「ループリック評価をはじめると、その振り返り（リフレクション）が必須になりますので、すでに全教科ループリックを作成しています。現在の高2～高3は現行の大学入試に挑むことになるので、そこまではしていませんが、すでに中1から高1までは導入しています。

主体的に勉強している生徒たちが、たった数回の定期試験で成績がつけられるよりも、このループリック評価が効果的だと思いますので…」と小島先生。

ループリック評価での目標や振り返りが生徒自身のモチベーションを高め自ら学ぶ姿勢を育てる！

—ループリック評価が、旧来のテストだけで評価する学習観を覆すきっかけになるかもしれませんよね。ふだんの授業からループリック評価で測っているので、生徒も自分の課題が見えるのですよね。

「もちろん朝テストや放課後までの再試や補習など、テストも徹底的にやることはありますが、それとは別に、生徒自身に『考えさせる』授業をしていくということです。」

—先にループリック評価を生徒に示しておくこともあるわけですね。

「たとえば国語で作文を書く場合には、私の場合は必ず原稿用紙に付記しています。それが新しい意味での『わかる授業』ではないかと思っています。先生の教え方がわかる、というのではなく、自分の目標や課題、自分がいまいる過程が『わかる授業』です。

—先ほど話の出たノートパソコンは、どの学年から導入しているのでしょうか？

「いまの中1は全員持っています。中2、中3はグローバルコースの生徒は全員持っています。ダブルディプロマコースの高1は全員持たせています。中学生には最初はiPadを持たせたのですが、キーボードがついてないので、やはりノートパソコンに変更しました」

—ダブルディプロマの生徒さんはいま何人いるのですか？

「第1期生の高3が13名、高2が17名、高1が18名です。」

—来年からの「ダブルディプロマ準備コース」にあたる中学生のクラスのなかで、高校での『ダブルディプロマ』コースへの進学希望者はどのくらいですか？

「中3は20名くらい希望しているようです。いまは



課外活動の形で放課後の補習などに参加しています。」
——来年の入学者からは、中学生から『ダブルディプロマ』につながる学び方ができるということですね。

「高校の『ダブルディプロマ』コースと混同されないように、『ダブルディプロマ準備コース』という呼称にしました。

そして嬉しいことに、カナダから来たダブルディプロマ担当の教員からは『5年間あると相当に違う』と言われています。もともとは中学段階の年齢の生徒から5年間で行うカリキュラムを、本校では高校3年間に短縮して行っているわけですから…。今後は中学から十分に時間をかけられることになります。

しかも5年のうち最初の中学2年間は無償で海外の教育プログラムが受講できることは、非常に恵まれていると思います」と小島先生。

生徒がどれだけ思考しているかをアクティブラーニングの定義としてユニークな授業を実践！

——来春2018年入試のことですが、これまでの「難進グローバル」という区分けがなくなりますね。

「中学入試問題の質としては、これまでの『難進グローバル』の出題がベースになると思います。そして午後入試には特待制度があるということも明記したいと思います。また、新設の『算数1科目入試』では、プレゼンも加えようと考えています」

——先ほど、中学生は英語週9時間中7時間がネイティブの授業とお聞きしましたが、「ダブルディプロマ準備コース」はもっと多くなるということですか？

「そうですね。週13時間になります。数学と理科を英語で学ぶ授業が入ってきます。最初は、数の概念なども日本の整数、奇数・偶数の考え方や少し違うことに戸惑うかもしれませんが、慣れば授業についていくのはそれほど難しくはありません。理科も『サイエンス』という考え方といえるかもしれません」

——そういう学び方に魅力を感じる受験生や保護者も多いのではないかと思います。確か遊園地でジェットコースターに乗りながら物理を学ぶという授業もあるようですね(笑)。

「面白いですね。あの授業は毎年やっています」

——アクティブラーニングについては、先生方はどのようなお考えなのでしょう。

「基本的には、授業のなかで、どれだけ生徒が考えている時間が多いか、生徒が思考している度合いが高いかどうかと定義しています。決して講義型の授業を

しないわけではなく、必要ところは聞かせたうえで、ただし説明し過ぎないようにしています。これが教員にとっていちばん難しいところです…。教科書や参考書に書いてあることは説明しなくても、自分たちで読んでくれるようにと…。

そういった知識・技能的なものは、特別なクエストがなくても、分担を決めて調べさせると、たとえば私が和歌の仕組みや表現技法を淡々と説明するよりも、生徒たちは面白い授業をしますよ(笑)。面白いので、他の生徒もよく聞きますし、突っ込みも入ってくれます。トリガーとしては、そういう入り口もあると思います。

そうして最後には『答えがない』問いを、ひとつずつ与えていくとか、そういう工夫はしています」

各大学も「ダブルディプロマ」を評価！国内の難関大学への進学要件をクリアし、今後はさらに海外大学へ！

——「ダブルディプロマ」の成果もかなり見えてきて、さらに来年からの共学化が楽しみでもありますね。

「ようやく大学にも知名度が上がってきたようで、この点は大きいですね。昨日、早稲田大学から『IB(国際バカロレア)校と同じ扱いで受験できる』と言っただけでした。上智大学も帰国生枠受験を認めてくれました。GMARCHへの大学訪問もしているのですが、青山学院の副学長とアドミッションの責任者にも『こういう(教育プログラムで学んできた)生徒ならば入学してもらおうよ』と言ってもらえました。津田塾大学もとても関心を持ってきています」と教頭の青井静男先生は、同校の『ダブルディプロマ』の認知度が上がった手ごたえを感じています。

——なるほど。そういう意味でも、日本の有名大学から引く手あまたなのですね。



教頭の青井静男先生

「海外大学に留学する費用が高いこともあり、国内の大学に目が向いている面もあると思います。いま生徒の希望は3割が海外大学希望ですね。3割が早稲田、3割がICU、それと『パラレル・ディグリー』の制度を導入して、ロンドン大学に進学できるようになった武蔵大学なども志望校に上がっています」

——今後は海外大学にも積極的に進学してほしいですね。

「そうですね、ただ、いまはまず第1期生の進路を成功させることを大切に考えています。」

— 今後は中学・高校とも、『ダブルディプロマ（準備）』コース以外の一般のコースにも、英語や他の教科の授業ノウハウを広げていく予定とお聞きしました。

「とくにルーブリックを用いた評価の仕方ですね。カナダの場合は中間・期末テストの評価割合が2割しかなく、あとはすべてふだんの授業の評価であることの違いが大きいですね」

— すぐに振り返りができることが生徒には大きいですよ。

「保護者も自分の子どもがどうしているか、いつでも見ることができます。また、ふだんの授業の評価が8割ですから、私たちが思っていた以上に生徒の取り組み方も変わってきました。これがダブルディプロマの生徒が伸びる秘訣のように思います。

それで松谷校長の希望により、他のコースでもふだんの授業の評価の割合をぐんと高めました」と青井先生。

瞬時に考え、意見を言える力。 幅広い表現のできる英語力。 その両方の力をバネに大きな成長を！

— 「ダブルディプロマ」の学び方は日本の従来型の学び方とは違いますよね。そこが受験生の保護者に伝わると、もっとファンが増えてくるように思います。日本的な学びよりダブルディプロマの学びの方が楽しいと思う受験生や保護者も多いのではないのでしょうか。

「私は絶対にそのほうが楽しいと思います（笑）。いまの高校3年生を見ていると、やはりダブルディプロマのクラスは違います。みんな意見をきちんと言うようになっています。しかも瞬時に考えて、自分の意見を必ず言うことができます。カナダの学び方はすべてが発表なので、アウトプットがしっかり身に着きます。そういう学びのノウハウを、ほかのコースにも広げていければ良いなと思っています。たとえば数学ではアクティブラーニングがしにくいという意見もありますが、カナダは逆で、それをしないことが信じられないと言われます。常に生徒に考えさせるところがすごいと思います。生徒が伸びているのを見ると、その手ごたえを十分に感じます」

— これからは中学から、希望すれば「ダブルディプロマ」の学び方ができるチャンスが開けたわけですよ。

「中学の英語9時間プラス4時間のカナダの授業が取れます。その4時間もアドバンスとベーシックに分けて行きますので、まったく英語を学んでいなかった生徒でも、一気に力は上がってくると思います。

カナダから派遣されているダン・マイルズ校長がよ



「ダブルディプロマ」の考え方を生かした授業では常に発表と対話、思考が中心になる！

く言うのですが、3年前に来日したばかりの頃は、廊下で生徒に話しかけると驚いて逃げ腰だったのが、いまはまったく違ってきて、学校自体が変わってきたと言います」

— 中学の英語9時間のうち7時間はネイティブによる授業で、文法はそのうち2時間だけという時間構成もすごいですね。日本型の英語学習との違いはどのようなところでしょうか？

「日本人が国語を教えるのと同じように、ネイティブの7時間は『英語で英語を教える』と考えていただくとうわりやすいと思います。授業ではひとクラスに3人のネイティブが入っていますので、とにかく生徒が話す、発表する時間が多いのが特徴です。

宿題もしっかり出ます。エッセイを書かせる。そこで伸びてきている感じがします。とくにエッセイは日本人がチェックしてはいけないように思います。ネイティブの目でみた英語にしていかなければいけません。日本人が教えるとどうしても表現が硬くなってしまいう面があって生きた英語になってこないのですね。」

— 文章的なルールより、中身の部分ですね。

「『こんな表現もあるよ！』とネイティブが教えてくれると、表現の幅も広がってきますよね。そこが大きいと思います」

— 生徒たちがある程度、発表を前提に自分で考えて授業に取り組む必要があるということですね。この先さらに発展させたい部分もあるのでしょうか。

「自分から発信する力、何事にも前向きに取り組む力を持った生徒を育てるには、教員が教え過ぎずに、生徒に任せて、多少の間違いだらうが何だらうが体験させてみるくらいの気持ちでいいとイケないのでしょうか。

そうやって一歩離れて、生徒の自主性を引いたところから見るようにしたいですね」と青井先生。

この先の同校の発展と男子も含めた生徒さんたちの成長が楽しみです。